



Title	おかえり、ブルーム : 『ユリシーズ』における嗅覚的放浪と帰還
Author(s)	宮原, 駿
Citation	Osaka Literary Review. 2023, 61, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

おかえり、ブルーム ——『ユリシーズ』における嗅覚的放浪と帰還

宮原 駿

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームは、ある一日ダブリンの街中を放浪する。彼の足の向く先は様々な誘因によって多角的に決定されていくが、とりわけ一つの要素——嗅覚——が注目されることは極めて稀である。彼が「現代のオデュッセウスである」ことは周知の事実だが（ファークノリ&ギレスピー 39）、ブルームの放浪と帰還がその嗅覚を通して活写されている側面を見逃してはならない。本論文では、ブルームが匂いによる多種多様な欲望に翻弄されつつ街を彷徨った後、自分のあるべき場所へと帰り着くまでを辿ることとする。

先行研究において、作家ジョイスの嗅覚への関心が注目されることはほとんどなかったが、例外的に2人の研究者によって詳述されている。ローラ・フロストは著書『快楽に関する問題』（*The Problem with Pleasure*）において、ジョイスの快楽主義的な世界を論じるに当たり、嗅覚が根源的なものであることを指摘する（Frost 34）。また、バーナード・ベnstockは『ユリシーズ』における嗅覚を幅広く論じながら、ブルームの広範な嗅覚への受容力に焦点を当て（Benstock 145）、匂いがブルームにとって重要な人間的な要素の1つであることを主張する（Benstock 143）¹。『ユリシーズ』における嗅覚を幅広く論じたこれらの先行研究に対して、本論文は、特にブルームの嗅覚に焦点を当て、彼の放浪と帰還を形成する重要な要素の一つとして匂いが果たしている役割を提示したい。

第1章 食の香り

ブルームの嗅覚の特異性はその初登場時において既に際立ったものとして提示されている。起床したばかりのブルームは朝食の準備をしなくてはならない。第4挿話冒頭には次のような1文がある。“Most of all he liked grilled mutton kidneys which gave to his palate a fine tang of faintly scented urine.” (4.3-5)。ここでは、彼の大好物、羊の腎臓がその尿の風味が特徴的な食べ物として現れる。一見したところ、この場面は食べ物に対する主人公の嗜好を描写するものであり、羊の腎臓に含まれる「尿の味を快として知覚するブルームの独特な味覚」を表現しているだけである（“a rare predilection for ‘a fine tang of faintly scented urine’ (Ca 4-5)” [Benstock 143]）。しかし、ベンストックがこの場面に着目して「味覚と嗅覚の共感覚的な融合」（“a synthetic conflation of the gustatory and the olfactory”）を指摘しているように（Benstock 143）、「風味」（“tang”）や「仄かに尿の香りのつけられた」（“faintly scented urine”）という表現は、ブルームの味覚だけではなく、むしろ彼の嗅覚的嗜好性への注意をも促す重要な符号なのである。従って、ブルームが初登場する第4挿話冒頭は彼の嗅覚の重要性に光を当てるため、彼の大好物を味覚だけではなく、嗅覚を通しても提示しているといえる。

ブルームは午前中に様々な用事を済ませた後、空腹を満たすため昼食を取る店を探してダブリンの街を彷徨し始める。彼の昼餉の旅路は昼過ぎの街中に漂う料理の芳香に導かれていく。まず、ハリスンの店から漂ってくる昼時の香りにブルームは食欲をそそられる。“Hot mockturtle vapour and steam of newbaked jampuffs roly-poly poured out from Harrison’s. The heavy noonreek tickled the top of Mr Bloom’s gullet.” (8. 232-34)。温かなモックタートル・スープの湯気や焼き立てのパンの香りがブルームの鼻先を流れ、重たく立ち込める昼時の芳香がブルームの食道をくすぐっていく。

この匂いに空腹を自覚したブルームは次にバートンの店へと足を向ける。しかし、そこで彼の鼻をついたのは悪臭の混交であった。“Smells of men. Spaton sawdust, sweetish warmish cigarettesmoke, reek of plug, spilt beer, men's beery piss, the stale of ferment. His gorge rose. Couldn't eat a morsel here.” (8. 670-73)。昼食を取ろうと店内に足を踏み入れてみると、噓せ返るような人いきれと煙草の芳香、零れたビールの匂い、客たちのビール臭い尿や、何かが発酵したような香り——雑多な匂いが混ざり合ってブルームを包み込む。初夏の一日、むわりとした昼時の店内に充満する芳香の強烈さは想像に難くない。あまりの匂いにブルームは早々に退散せざるを得ない。この場面に関して、ベンストックは“Nowhere else in *Ulysses* . . . is there as defined a locus of olfactory putrescence as at the Burton, where Bloom's scented fantasies and delicately balanced perfumes of desire are demolished by the reality of human stench.”と述べる（Benstock 144-45）。彼はブルームの匂いにおける空想や欲望の香りが人間的な汚臭の現実によって挫かれていると解釈するのである。しかし、第16挿話においてもブルームはロークのパン屋の香りに欲望と空想を喚起されている。

while the other [Bloom] who was acting as his *fidus Achates* inhaled with internal satisfaction the smell of James Rourke's city bakery, situated quite close to where they were, the very palatable odour indeed of our daily bread, of all commodities of the public the primary and most indispensable. Bread, staff of life, earn your bread, tell me where is fancy bread, at Rourke's the baker's it is said. (16. 54-59)

ブルームはロークのパン屋から流れだす香ばしいパンの香気を「内なる満足」を以って吸い込んでいる。長い1日の終わりに近いこの場面は、彼の嗅覚が物語を通して鋭敏に機能していることの証左である。

ようやく、ブルームはデイヴィ・バーンに辿り着きチーズ・サンド

ウィッチを注文する。サンドウィッチをちぎりながら食べるブルームだが、その味が彼の意識に上ることはほとんどない。むしろ、そこから連想される思索で満たされている。サンドウィッチに挟まれたマスタードの辛さを感じた後、ブルームはワインを注文する(8. 764-93)。“He [Bloom] smell-sipped the cordial juice and, bidding his throat strongly to speed it, set his wineglass delicately down.” (8. 795-96)。サンドウィッチに関してはマスタードの辛味以外にほとんど言及しなかったにも拘わらず、ブルームはワインをその香りを通して丁寧に味わっている。とりわけ、ワインを飲む様子は「くんくん吸った」(“smellsipped”)とあえて造語によって描写され、ブルームが味覚よりもむしろ嗅覚を通じてワインを嗜んでいることが強調されている。²

第2章 性の香り

ブルームの放浪を彩る香りとして、様々な女性たちから発散する性の香りはさらに重要な役割を果たしている。ブルームは妻モリーのもとに帰るに帰れないままダブリンの街を彷徨っていく。フロストは、オポパナクスの香りが妻モリーに対するブルームの情熱を、彼の恋敵ボイランと妻の初めての出会いと結びつけると述べる時——“In his mind, the smell of opoponax links his own passion for her—‘Know her smell in a thousand’ (13: 1024)—to her first meeting with his rival.”——妻に対するブルームの欲望を前提とする (Frost 54)。ダブリンの街を放浪する中、未だ家に帰ることができないブルームは妻に代わる欲望の対象を探しているように思われる。ここでは、ブルームがその代替的な欲望の対象へと接近していく様子が香りを通じて描かれていることを見ていきたい。

第5挿話でブルームは文通相手のマーサ・クリフォードからの手紙を受け取っている。彼女の手紙には一輪の花が添えられており、ブルームはその花をはがして匂いを嗅ごうとする。“He tore the flower gravely from its

pinfold smelt its almost no smell. . . .” (5. 260)。しかし、花はもはやその芳しい香りを喪失しており、ブルームの鼻腔に届くのはわずかにその痕跡のみである。この場面についてフロストは次のように述べる。“She and Bloom have no past—and no embodied present—together, and this is part of Martha’s appeal to him as an alternative to the passionate, perfumed woman he loves, redolent as much of the past as the present.” (Frost 47)。つまり、フロストは、ブルームにとって妻モリーとマーサが、彼と時間を共有する者と、しない者という対照的な存在であり、このことが両者に関連付けられる香りの濃淡により提示されていると主張するのである。こうしたフロストの意見にも一理ある。しかし、ブルームにとって性的な香りとはマーサとモリーという二人の女性における極端な対照によってのみ表現されているのではない。むしろ、物語の進行とともにグラデーションのように漸進的に濃厚になっていく性質を有するものである。

フロストは第13挿話を「目と鼻のエピソード」と呼び (Frost 49)、ゲーティ・マクダウェルが注目される挿話前半部において視覚的効果が強調される一方、ブルームに焦点が当たるその後半部では嗅覚的な経験への注意が喚起されると述べる。

While olfactory pleasure influences every episode of *Ulysses*, the jocoserious Gilbert and Linati schemas for *Ulysses* steer us toward understanding “Nausicaa” as the “eye and nose” episode of the novel. The first half of the episode emphasizes visual effects, as the couple on the beach gaze at each other, and the second half calls attention to olfactory experiences, pivoting in the switch from Gerty’s narrative to Bloom’s stream of consciousness. (Frost 49)

このことを踏まえて、ブルームが香りを通してゲーティをどのような対象として経験しているか吟味する。ゲーティは脱脂綿に香水を沁み込ませて持ち歩いており (13. 153)、彼女が腰を下ろしていた場所にやってきたブ

ブルームはその残り香を嗅ぐことになる。“Wait. Hm. Hm. Yes. That’s her perfume. Why she waved her hand. I leave you this to think of me when I’m far away on the pillow. What is it? Heliotrope? No. Hyacinth? Hm. Roses, I think.” (13. 1007-09)。ブルームはこの香りをガーティが彼に対して残してくれたのだと捉え、その匂いの種類を「嗅」明しようとする。この点を考察する上で『匂いの哲学』におけるシャンタル・ジャケの説明が極めて有効である。

匂いにより、他者の身体は精神となりその最も浄化された本質を表す。それを吸い込むことで私は他者の身体を所有するが、それは私の鼻の下を逃げて行く。というのも、この身体から出てくる発生物は飛び去り、とらえどころのない抜け殻のようにこちらにやってくるからだ。したがって、他人は、同時に捉えられも捉えられなくもある。不在を抱えたその存在の中で、匂いは私に対して影響力を持ち、心霊体のように他人に対する支配力を私にもたらす。(ジャケ 56)

ジャケによれば、香りを吸い込むことは他者を所有する行為である。しかし、その香りは所有されると同時に逃れゆくものでもあると述べられる。このことを念頭に『ユリシーズ』のこの場面を読解するならば、ブルームはガーティの香りを吸い込むことで彼女を所有しようとするものの、その端から彼女は捉え難く逃れて去ってしまうということになる。そもそも、ブルームが嗅いでいるのがガーティの残り香であって、とうに彼女自身がその場から逃れ去ってしまっていることを鑑みれば、その芳香の逃走は彼女自身の逃走を時間差で模倣したかのようでもある。

一方、ブルームがガーティの残滓としての香りに引き寄せられることは、女性として男性を魅惑する彼女の戦略の結果でもある。コンスタンス・クラッセンは「魅力的にし、男を惹きつけ、後を追いかけさせ、選ばせるのは、女の義務であり、女は狩人に匂いの跡を残さなくてはならない獲物なのだ」と述べ、狩人の男と獲物の女という構図が香りによって構築され

ていることを指摘するのである (234)。加えて、井川ちとせは「彼女の魅力を構成するかよわさと優美さは、じつはおりものの過多と鉄分不足による虚脱感によるものである」と指摘するが (18)、香りによって巧妙に演出されているからこそ、ガーティが「かよわさと優美さ」を備えた女性として受容されているとも捉えられる。このことは次のジャケの言葉によって理解される。「香りはまるで醜さを隠す遮蔽物のように働き、そこに高い知性だけが見分けられるこの内なる美の見かけを与える。香りは、感覚がとらえる表象を変化させ、理想像を作りあげ、欠陥を隠蔽することで気を他に回し、自己演出するのに貢献する」(67)。つまり、ガーティの残り香は実際の瑕疵を覆い隠し、彼女の魅力を最大限に表現するために用いられていると考えられるのである。

けれども、このようなガーティの美少女としての演出がブルームに対して功を奏しているとはいえない。ヒュー・デイヴィスは、“... all the objects with the potential for fetishization to some degree in ‘Nausicaa’—carry strong olfactory associations that constitute in large part, if not primarily, their appropriation as sexual objects” と述べる (Davis 425)。このようにガーティは独自の人生やアイデンティティを備えた一人の女性としてではなく、ただの性的なモノとしてブルームによるフェティシズムの対象となっているのである。しかし、それだけに止まらず、ブルームはガーティの香りの安っぽささえも嗅ぎ取ってしまう。ブルームは彼女の薔薇の香りの香水について “Sweet and cheap: soon sour.” と独り言つのである (13. 1010)。加えて、フロストはこの薔薇の香りが月経の婉曲的な表現であり、ブルームの思考をその汚臭へと導いていることを指摘する (Frost 52)。このようにガーティの香水の芳香はブルームの鼻を刹那的に魅了するが、その芳しい表層に隠匿された安っぽさや汚臭を露呈してしまい、彼の欲望の対象としての価値を喪失していくのである。

ベンストックは第 15 挿話に関して次のように述べる。“The Nighttown

into which Bloom emerges is a miasma of “*stagnant fumes*” that “*arise on all sides*” from “*drains, clefts, cesspools, middens*” (Ci 138-39)—those of the city slum paralleling the drains, clefts, cesspools, and middens of the human body. (Benstock 145). 彼はこの挿話で活写される夜の街が様々な汚臭に満ちた場所であることを指摘する。とりわけ、彼も着目しているように、ブルームは娼婦たちの香りに導かれていくことになる (Benstock 146)。嗅覚と性との関係について、C・ブラックリッジは興味深いことを述べている。「嗅覚は常に性的感覚の一種だと考えられてきた。それも最も親密で、最も動物的な性的感覚である。ルソーに言わせれば、嗅覚とは『記憶と欲望の感覚』なのである。匂いは強力な性的刺激剤であるとみなされてきた」(ブラックリッジ 363)。このように古来より嗅覚は性的な欲望を掻き立てる感覚であるとみなされてきたのである。ここでは、このことを念頭に置き、ブルームとともに夜の街を散策してみたい。

ブルームは娼婦ゾーイの脇の匂いに誘われつつ、衣服から漏れてくる男の残り香を嗅ぎ取る。“(*He hesitates amid scents, music, temptations. She leads him towards the steps, drawing him by the odours of her armpits, the vice of her painted eyes, the rustle of her slip in whose sinuous folds lurks the lion reek of all the male brutes that have possessed her.*)” (15. 2014-17)。ジャケによれば、「匂いを嗅ぐことは、享樂への前奏曲と後奏曲」であり(106)、ブルームはこれから味わう快樂の「前奏曲」をゾーイの脇から漂ってくる香りに感じ取り、快樂を味わった男たちが残していった匂いを嗅ぎ取るのである。つまり、ブルームはゾーイの纏う芳香に時空を超越した性的快樂を予期することによって、その欲望を刺激されているといえる。

こうして彼はコーエン夫人が切り盛りする曖昧宿へ入っていく。“*Averting his face quickly Bloom bends to examine on the halltable the spaniel eyes of a running fox: then, his lifted head sniffing, follows Zoe into the music room.*” (15. 2038-40)。玄関脇の机に置かれた狐の置物に視線を向けた後、

ブルームはゾーイの香りに誘われて彼女の後を追っていく。ここで彼は狐の置物に対する視覚的な関心でも、ゾーイの外見的な魅力でもなく、彼女から発散される芳香に嗅覚的に魅了されて行動しているのである。酩酊したブルームの意識において、ゾーイはニンフへと姿を変じていく。しかし、ブルームはそうした視覚的な幻想から、ある匂いによって現実へと引き戻されてしまうのである。“(*with a cry flees from him unveiled, her plaster cast cracking, a cloud of stench escaping from the cracks*) Poli . . . !” (15. 3469-70)。ブルームから逃れゆくゾーイの顔の化粧は輝割れ、その裂け目から汚臭が漏れ出す。化粧という外見的な美の裂け目から視覚的な美醜が露呈するのではなく、ブルームの幻想を挫折させるような汚臭が漏れ出してくるのである。

以上のことから、ブルームが香りによって性的な欲望を掻き立てられながら、ダブリンの街を彷徨している様子が明瞭に看取されるだろう。文通相手マーサからの手紙に添えられた花の微かな香りから発程し、浜辺ではガーティの香水の残り香を経由し、娼婦ゾーイの発散する強烈な芳香へと接続する。このような芳香／彷徨の流れを概観すると、ブルームの旅路が進行するにつれて、彼の鼻腔に吸い込まれる性的な香りが芳醇になっていくことが確知される。まず、マーサの香りはあたかも彼女が遠くにいるためかのように、ほとんど嗅ぎ取れないほどの花の香りとして現れる。次いで、ガーティの残り香は彼女が先だって座していた地点に残されたもので、ブルームは明瞭にその匂いを嗅ぎつつ、離れた場所にいる彼女を視野に収めている。最後には、娼婦ゾーイの匂いが鼻をつくほどの強烈な芳香として現出し、その身体もブルームの身体と近接的な位置関係にある。すなわち、物語の進行につれて濃厚になっていく性的な香りは、ブルームと彼の性的欲望の対象が接近していつている様相を体现しているといえるのである。

第3章 安堵の香り

しかし、ブルームが真に希求し、帰還する芳香は食や性の香りではない。食や性の香りはブルームの鼻を惑わし、ダブリン市井を彷徨わせるものである。オデュッセウスが故郷と本来の地位へと帰り着くことと異なり、ブルームは自己とその片割れの元へと帰還することになる。そもそもブルームは初登場の挿話最終部においてすでに自分自身から放出される匂いを嗅いでいる。“He read on, seated calm above his own rising smell.” (4.512-13)。ここでは、ブルームが屋外の厠で用を足しており、その便の匂いが立ち上る様子が描写されている。このように、外出前のブルームが外的な芳香ではなく、自分自身から発される匂いに包まれ、それを体内に吸い込んでいることは注目に値する。対照的に、外出先で彼が自分から発散される香りに注意を向けるような場面は稀である。

深夜になりようやく家に帰り着くと、ブルームは自己の芳香を意識的に嗅ぐこととなる。

[He] picked at and gently lacerated the protruding part of the great toenail, raised the part lacerated to his nostrils and inhaled the odour of the quick, then, with satisfaction, threw away the lacerated ungual fragment.

Why with satisfaction?

Because the odour inhaled corresponded to other odours inhaled of other ungual fragments, picked and lacerated by Master Bloom. . . (17. 1488-94)

ベnstockはこの場面を引きながら、ブルームがこの匂いに「生との満足なつながり」(“a satisfactory association with life”)を感じ取っていると主張する (Benstock 150)。さらに、彼は、ブルームが「嗅覚的な想像力」を通して「自己の本質」を求め、また、「個人的な嗅覚的アイデンティティを希求している」ことを指摘する (Benstock 153, 145)。これらのこ

とを踏まえると、ベnstockが提言する「生との満足なつながり」や「嗅覚的アイデンティティ」などから、子供時代に嗅いだ匂いと、物語現在において嗅ぐ匂いの同一性にブルームが自己の同一性を見出していることが窺えるのである。

とりわけ、彼が少年時代に嗅いだ爪の芳香が複数形で表記されている点を見逃してはならない。物語現在に、眼前ならぬ「鼻」前にある爪の匂いを嗅いでいることを単数形によって示していることとは対照的に、この複数形は若い頃に習慣的に爪の匂いを嗅いできたことを示唆しているのである。この場面ではブルームが習慣的に嗅いできた匂いの同一性を通じて、自己のアイデンティの時間的な連続性を確認しているのである。このことを裏付ける視点として、ジャケの知見が有用である。

実際、現在の自我は過去に根を張り、その分枝は幼年時代に遡る、独特の記憶として定義される。この視点から言えば、匂いは、自分でも知らずに以前の存在の大部分を明らかにするため、自我に接触するための王道を構築している。したがってある人間は体臭を通じてだけでなく、かつて嗅いだ香り全てを通してその奥深い自我を発見しその自己同一性を自覚することができるのだ（ジャケ 74）。

従って、ブルームが過去に習慣的に嗅いだ爪の匂いと、物語現在のこの日において嗅いだ爪の匂いを、同一の匂いとして認識することは、ジャケの言葉を借りれば、「現在と過去との間に橋を投げかける」（98）ことだといえるのである。さらに、この場面が一日の放浪の末の帰宅の場面であることを踏まえれば、これはベnstockが述べるようなアイデンティティの探求というよりも（Benstock 145）、むしろ自分自身のもとへの帰還と捉えるべきであると考えられる。

ブルームが一日の終わりに帰り着く香りは、自己から発散される香りだけではない。彼は同時に妻モリーの香りへと帰還するのである。モリーの

香水については第5挿話でマーサが手紙でその種類を訊いているが、デイヴィスはブルームが“*Peau d’Espagne*”と答えている点に言及しつつ、すでにモリーがその香水を使っていないことを指摘する (Davis 423-24)。つまり、この香水の香りは思い出の中のものに過ぎず、現在のモリーの香りではないということに留意すべきである。

実際、第17挿話でブルームが帰宅した時に吸い込む香りはこれとは異なるものである。

A pair of new inodorous halvesilk black ladies' hose, a pair of new violet garters, a pair of outsize ladies' drawers of India mull, cut on generous lines, redolent of opoponax, jessamine and Muratti's Turkish cigarettes and containing a long bright steel safety pin, folded curvilinear . . . all these objects being disposed irregularly on the top of a rectangular trunk. . . (17. 2092-98)

モリーの脱ぎ捨てた衣服の内、インド製モスリンのズロースにはオポパナクスやジャスミン、煙草の芳香が漂う。煙草の匂いが不倫相手ボイランのものであるとすれば、残りのオポパナクスとジャスミンの香りが現在のモリーの香水の芳香ということになる。実際、前章における引用においてフロストもオポパナクスの香りを指摘していたように (Frost 54)、第13挿話においてブルームは次のように述べている。“Why Molly likes opoponax. Suits her, with a jessamine mixed.” (13. 1010-11)

この直後、ブルームは妻の眠るベッドに辿り着き、不倫の痕跡を発見してしまう。“New clean bedlinen, additional odours, the presence of a human form, hers [Molly's], the imprint of a human form, male, not his, some crumbs, some flakes of potted meat, recooked, which he removed.” (17. 2123-25)。シーツに残った人の寝た後がボイランによるものであることを鑑みれば (北村 769)³、“additional odours”は愛人を迎えるためにモリーが振りかけておいた芳香か、ボイランの香水の香り、もしかすると、汗や

精液などの分泌液の匂いである可能性もある。いずれにせよ、妻の不倫を裏付ける匂いであることは間違いない。

しかし、それでもブルームが帰還する場所は、妻モリーのもとなのである。就寝の場面においてブルームは妻から発する芳香に陶然となって眠りにつこうとしているように思われる。“He kissed the plump mellow yellow smellow melons of her rump, on each plump melonous hemisphere, in their mellow yellow furrow, with obscure prolonged provocative melonsmelonous osculation.” (17. 2241-43)。ブルームは妻の臀部に口づけをしながらその芳醇なメロンのような香りに陶醉しているようである。というのも、「メロン」と「芳醇な」(mellow)という言葉を重ね合わせつつ、多様な韻を踏んでいく語りには、ブルームの意識が多かれ少なかれ投影されると推定されるからである。この場面を考える上で、ジャケの意見が有用となる。

他人の匂いを嗅ぐ、または他人に匂いを嗅がれるということは、いつでも、ある存在の親密な部分を発見しその内部に侵入することなのだ。それは匂いが身体の発散であり、皮膚の境界を越えた内面世界の表面化であるということによる。匂いと他人とは発散され、自分によって吸い込まれる肉、同時に外と内、内と外である。他人は世界への支配を広げ、匂いによってその身体を拡張する。匂いはこのようにして他人との同化を可能にし、自分の身体と他人の身体の距離を消し去る。(ジャケ 56)

ジャケは他者の匂いを吸い込むことを、その内側へと入り込み、内と外の境界を消し去ることによって、自己と他者が溶け合うことであると説明するのである。この見解を踏まえれば、ブルームはモリーの身体から発散される芳香を嗅ぐことで、愛する妻と一つになろうとしているといえる。実際、フロストは、少なくとも思い出の中において香りがこの夫婦を結びつけるものであることを指摘している (Frost 46)。こうして、ブルームは

一日の最後に愛する妻の香りへと帰り着き、安堵して眠りに落ちていくことになるのである⁴。

結論

以上のように、ブルームは様々な匂いに導かれながらダブリンの街を放浪し、最後には自分自身と妻の匂いのもとへと帰還することになる。だからこそ、彼の放浪は家から出発する時点、つまり、彼が便の臭気——自身の芳香——に包まれる時点を区切りとして家の外へと出発し、帰宅したときに再びそのなじみ深い自分自身と伴侶の芳香のもとへと帰り着くのである。振り返ってみれば、自宅と外界との境界上にある庭の廁がその重要な区切りの場としてあったことに気づくはずである。その後、ブルームは食と性の香りに導かれながら街中を此方彼方と彷徨し、最終的に自分と妻の香りへと帰り着くことで一日の幕を引く。従って、ブルームの放浪と帰還が現代版オデュッセウスのそれとして提示される際、それはブルームの嗅覚を通して描かれている側面が窺われるのである。

注

- * 本研究はJSPS 科研費課題番号 JP 22 K 13084 の助成を受けたものである（研究種目：「若手研究」、研究課題名：「イギリス大戦間期文学における嗅覚の表象」）。
- ** 本稿は、2022年5月22日に日本英文学会第94回全国大会における研究発表に加筆・修正を加えたものである。
- 1 ベンストックの論は、ブルームだけでなく、ステイーヴンやモリーも取り上げ、『ユリシーズ』の全体に散りばめられた嗅覚的要素を遍く拾い上げる。しかし、その弊害として、論点が不明瞭となってしまう側面が見受けられる。従って、本論ではブルームに注目することで、『ユリシーズ』における嗅覚表象の1側面を明らかにしたい。
- 2 この場面で初登場する Nosey Flynn の綽名“Nosey”は、読者に対して嗅覚への注目を促しているのかもしれない（8.737）。
- 3 北村富治は「モリーとボイランは居間の安楽椅子の上だけではなく（17.1294 参照）、ベッドの上でも性交していることにブルームは気付いた。」と述べる（769）。つま

- り、彼はシャツに残る痕跡がボイランによるものであることを指摘するのである。
- 4 プルームは妻に密着してその香りを吸い込んでいるため、彼女の芳香に満たされていると見なしたいところであるが、彼の鼻腔にボイランの残り香が紛れ込むことで不協和音を奏でている可能性も否定できない。

参考文献

- Benstock, Bernard. "James Joyce: The Olfactory Factor." *Joycean Occasions: Essays from the Milwaukee James Joyce Conference*, edited by Janet Dunleavy, et al., U of Delaware P, 1991, pp. 138-56.
- Davis, Hugh. "'How Do You Sniff?': Havelock Ellis and Olfactory Representation in 'Nausicaa.'" *James Joyce Quarterly*, vol. 41, no. 3, 2004, pp. 421-40.
- Frost, Laura. *The Problem with Pleasure: Modernism and Its Discontents*. Columbia UP, 2015.
- Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler and et al., Random House, 1993.
- 井川ちとせ「ガーティのケース：『ユリシーズ』第13挿話のメランコリックなヒロイン」『言語文化』、45号、2008年、pp. 17-33。一橋大学機関リポジトリ、doi:10.15057/16822。
- 北村富治『ユリシーズ大全』慧文社、2014年。
- クラッセン、コンスタンス他『アローマ：匂いの文化史』時田正博訳、筑摩書房、1997年。
- ジャケ、シャンタル『匂いの哲学——香りたつ美と芸術の世界——』岩崎陽子・北村未央訳、晃洋書房、2015年。
- ファークノリ、A・N、M・P・ギレスピー『ジェイムズ・ジョイス辞典：A to Z』ジェイムズ・ジョイス研究会訳、1997年。
- ブラックリッジ、C『ヴァギナ 女性器の文化史』藤田真利子訳、河出書房新社、2011年。
- ホメロス『オデュッセイア』松平千秋訳、上下巻、岩波書店、1994年。